【台風が教えてくれたもの】

翔凜中学校　二年　宮沢　莉久

「水」それは、今のみなさんの日本では当たり前の存在であるのかもしれない。しかし、私が小学校二年生、八歳だったであろう時、その当たり前にあった友達のような水がまるで消えさってしまったのだ。

時は二〇一九年九月台風１５号が千葉県内を荒らした。台風のガラガラドカーンという音が響き渡った。そんな音に少し怯えながら、とっさにテレビをつけようとすると家中の電気がパチッといい消えてしまった。そして、ニュースでは、電気だけではなく、断水になるかもしれないといっていた。私は、その意味を深く理解していなかった。翌朝、停電は続いていたが、そんなことよりも私が、ショックを受けたのは水が使えないという事実であった。水が無ければトイレも流せない、お風呂にも入れない、そんな状態が何日続くかわからない迷宮に入ったような感覚であった。その日、水道の蛇口は口を閉ざしたまま、何も話しかけてくれなかった。いつも通りひねったはずなのに水は一滴たりとも出てこない。まるで、長く付きあっていた友達が突然、何の前触れもなく姿を消してしまったような心境であった。私は思わず何度も蛇口をひねり直したが、水は出なかった。台所では父が冷蔵庫の中からペットボトルの水を取り出し、「今日はこの水だけで生活するからね。」と言った。その一本の水が、私たち家族の支えとなっていた。普段は何気なく飲んでいた水が、その時はひと口ごとに心の奥そこから本当にありがとうと言いたくなるほど貴重であった。

水のない生活は3日ほど続いた。配分されたペットボトルをトイレに使ったり飲み水に使ったりして耐えていた。ニュースでは「まだ復旧のめどは立っていません。」と伝えられた。私は、そのたったの一言が心に響き渡るくらいとても重く感じる凶器のようであった。しかし、私達はその苦しい生活に耐え続けてようやく水道が復旧した。蛇口から流れる水は、「おかえり」とささやいてくれる友の声のようであった。私は、その音を聞きながら手に受けた水の冷たさとやさしさを忘れないようにしようと思った。私はその水が流れているというれしさとそのとても苦しかった三日間を思い出し、瞳からも一滴、二滴となぜか水がこぼれてきた。水は、私たちの暮らしを支えるスーパーマンみたいだと思った。

私が体験したのは、たったの三日間の断水であった。しかし、その三日間で私の心を大きく変えた。水があると、心に余裕ができるということだ。水がないと私のように怖くなったりして、人は落ちつきさえも失ってしまう。それほどに水は、私達、生き物の命と生活の中心にあるのだ。世界には毎日のように安全な水を手に入れられていない人がたくさんいるという。私はこの生活を通して水がないと、とても不便で苦しいものだと実感できた。そのため、水を十分に得られていない人たちがいるのだから自分たちが水を大切に使っていく必要があると思った。私たちがあたりまえのように使っていた水は、実はとても恵まれたものであった。この出来事を通して私は、水のありがたさを体の奥深くで知ることができた。台風が来なければもしかしたら今も水を当たり前に使っていたのかもしれない。そんな台風がくれた経験と水というもののありがたさを私が次の世代に受け継いでいく。そのため、これからは水をただの資源、ではなく、「命の仲間」として大切にしていく。私は日頃から蛇口から水が出ていたら閉めるなどの節水を心掛けて、水への感謝を忘れないと決意した。